

この冊子は、令和四年春の慰霊祭さくら祭
の際、この父子草を講話し、遺族、来賓、参拝
者にお渡ししたものです。

令和四年さくら祭

ご英霊の思いに 応えるために

生きていたご英霊

第八版
令和四年さくら祭

靖国神社

戦後の自虐史観から、日本人が知らなければいけない歴史を、封印され今日まで来しました。ご英霊はさぞ悔しい思いをされているのではないかと思うのです。

そんな思いからこの冊子を皆様にお届けしております。私はジャーナリストではありませんし、歴史家でもありません。田舎の神職です。真実を調査する資金ありませんし、ネットワークありません。只々市井の図書等各種情報から、私がお伝えしたいことを紹介いたします。

私の若い頃商用で、あのシベリアの大地を踏むことがありました。ウクライナ山脈の西側の麓に、ペルミという軍需産業の街があります。その北二百^キ先にソリカムスクという街と、ベレズニキという街があります。その街にはある特種な金属を製造している工場があり、その工場に商用でいくのですが、話はこれではない。

そのペルミは、シベリア鉄道が通る分岐点ですが、このシベリア鉄道、距離にして八千六百^キ世界一長い、旅情豊かな鉄道で、この鉄道で旅をしたいなと思ったものです。しかしあることから、シベリア抑留のを知り、今までその歴史を詳しく知らなかったことに愕然としたのです。

この鉄道はその鉄路建設に、日本のシベリア抑留者六十万人が強制労働させられ、零下四十度の極寒の地で、寒さと飢え、重労働、そして六万人がああ極寒の地に消えていったのです、たとえ我が祖国に帰還しながらも、悲しい人生を送らねばならなかった方々がいる事を忘れてはならない、その歴史を忘れてはならないの思いつから本日はその話を紹介してみたいと思います。

みなさんも、ご覧になったことがあるかもしれません。かなり昔の映画です。私が十七歳高校生の頃の作品です。私は高校の頃映画選定委員会というのがあってその委員だったのです。今では考えられませんが、小野田市内で上映されてる映画を見て、これは素晴らしい映画よと推薦する係だったのです。

その当時観たかどうか記憶に有りませんが、それが働き盛りにシベリアという大地を踏む経験をし、今になって護国神社に奉仕する機会を頂いて今でこそ解ります。そうです、戦後日本はものの見事に自虐史観を植え付けられ、西洋人に不利なことは、教えられてこなかった。また、このような映画があったとしても、先生は、あえて勧めはしなかったのかも知れません。

さ、その映画の話です。



ある駅の踏切の側におでん屋を出している淡路恵子演ずる竹子の屋台に、仕事を終えた作業着姿の五十過ぎの土工風の男渥美清演ずる平井という男が、酒を飲みにやってくる。そして一杯入ると、佐渡の相川音頭を歌い始める。(普通の人は佐渡といえは佐渡おけさで、相川音頭といってもピンとは来ないが)

しかしこの客、何かと、絡んでくる、時には踏切の警報機の音に絡み、うるさいんだよと女将にいう、女将が答える。

「哀しいときは哀しく、愉(たの)しいときは愉しくなるんだよ」。つと答える。

粗暴で、どこか淋し気できて、鼻ツぱしらの強い客で酒癖が悪くそれほど良い客ではないが気ツプだけは良く金払いは良い、変わった客であるある。

そこに常連の若い客、近くの安アパートに住む、アルバイトの夜勤前の苦学生、大学を目指す青年、名前は西村(石立鉄男)が毎日夕食のためににやってくるが、些細なことから口喧嘩になる。最後は

「外に出る俺と相撲で決着をつけよう」

平井は酒も入っており、若い西村に敵うはずはなかった。いつも西村青年に投げられ、もんどりうって負けるのである。

その後も毎晩のように、そのおでん屋に、平井はやって来、そこに西村がやって来る、待っていたかのように平井が悪態をつき青年に絡むのであるが、西村は夕食を済ますと、急ぎますのでと、やんわりとかわして帰っていくのである。

ある晩、いつものようにおでん屋にて、平井が酒を飲んだと、若い娘(由美子・星由里子)がおでんを買いにやってくる。さすが平井も悪態はつかないが、会話を交わす。竹子からその若い娘は青年・西村の恋人であることを知り、西村は苦学生でアルバイ



トをしながら大学を目指しているとの境遇を聞き、今日は西村が夜警の仕事で雨に当たり風邪をひいて寝込んでいたので由美子が代わりにおでんを買いにやってきたことを知る。

さて次の日もいつものように平井はやって来る。帰り際、鍋におでんを入れてくれという。しかし其の量は、一人が食べるには多すぎる。竹子は少し多いのではというといやいや飯場で皆で食べるのだと言うが、話しているうち、竹子はおでんを持って青年を見舞いに行くことを察し、粗暴な中にも平井の心の奥底にある優しさを感じるのである。

案の定、平井は西村の安アパートを訪れ、青年と一杯飲みながら人生を語るうち、青年が働きながら、目指す大学受験のため予備校に通い、勉強していることを改めて知る。

が、昼間だけの働きでは予備校のお金が足らなく、夜警の仕事をしている事を知ることが、夜警までのしごとをすると体にも堪え勉強もはかどらなく、もう大学は諦めようとおもっていると告げられる。

そこに、恋人・由美子がやってくる。三人で世間話などしながら大学受験の話になるが、

「俺はおまえとおでん屋の前で喧嘩したがいつも俺は負ける、しかし俺の心は負けちゃおらんぞ、そこでだ、青年！お前は心で俺に負けている、そこで目指す大学受かったら本当にお前の勝ちだ、落ちたら俺の勝ちだ。と持ちかけるが、青年は、

「さっきから言っているようにもう俺は大学諦めたのだから勝負にならない！」つと。
平井は、青年の手をとって、

「柔らかい手だな、こんな手をしやがって、こんな手で人生を諦めたなんていうな、諦めるというのは、俺の手のように、働いて働いて、ゴツゴツになって言うもんだ。お前の場合は勉強して勉強して、手に大きな鉛筆タ



コが出来るまで勉強して言うもんだ、いまから云うな」 と叱るのである。
その言葉に由美子も

「そうよこのおじさんの言う通りよ」

後日、いつものように竹子のおでん屋で、いつものように減らず口の平井は相川音頭を歌いながら飲んでいる。テーブルの隅に「撫子の花」がおいてあり、以前竹子から撫子の別名が父子草ときいて、その父子草という別名に感心したのか、平井はこの撫子の花の持ち帰ると言っていたので、

「包んであげる」

とすると、平井が撫子の花の鉢を抱え、じーと見つめていたかと思うと、突然床に叩きつけたのである。驚く竹子であるが、平井は、割るやいなや屋台のテーブルに泣き伏し、

竹子は、

「どうしたの どうしたのよ！」 と問いかける、

涙を流しながら、平井は彼の過去を語り始めるのである。

そこには、初めて明かされる平井の今まで誰にも話さなかった悲しくも厳しい人生が語られるのである。

俺は 生きてる英霊（生きているのに戦死したとして処理された兵士）だ、俺は、佐渡で妻が有り一人の男の子がいた。しかし出兵。日本は敗戦、捕虜となりシベリアに抑留。寒かった、ひもじかった、辛かった、いつ日本に帰れるのだろう、そんな生死をさまよい、厳しくも長い抑留生活、そして待ちに待った祖国に帰れる時が来た、敦賀に上り、すぐさま佐渡に飛び帰ったよ。

しかし、なんと妻は自分が戦死したと思い再婚していたのである。絶望と、いきどお憤りと、悔しさに、慟哭するの



だが、しかし懐かし我が家の、窓から、愛する妻、そして我が子、そして見の知らない男、多分主人である。その一家団欒をみて、妻の今の幸せを崩してはと、俺は逃げるように佐渡を去り、今の日雇い労働で生活をし、このざまだよ、というのである。

この話に竹子は、あの粗暴で減らず口の平井の、隠された人生を初めて知るのである。

ある雨の日、竹子が青年のアパートを尋ねる。

竹子は西村の前に、

「これ見ておくれよ」

と、くちやくちやのお金を広げる。

それは 七万と 五千円と 三百円。

平井から預かったという。

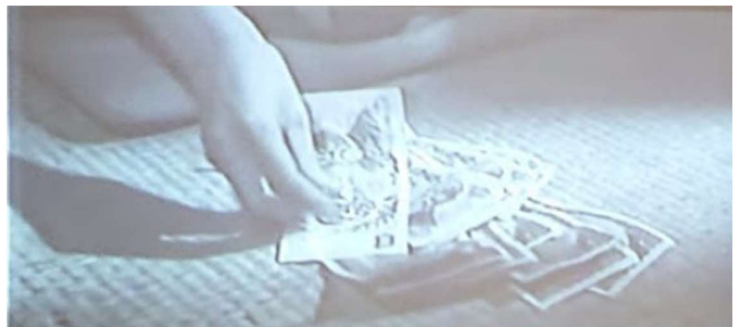
七万五千三百円は、七五三というお目出度いことがあるようにって縁起のいい数字にしてあるのである。

「え！ こんなお金受け取れないよ！ 今おじさんどこにいるの！」

「わからないわ。屋台を開けようとしたら、破れた番傘さしてリュック背負って待ってた、俺今度、飯場が変わるから、ちよくちよく来れないと思う、すまんがこれをあの青年にわたしてくれ」って。

「このお金は、あの人が、貯めてた大事な財産と思うよ。それとね、これをわたしてくれ」ってそれは撫子の種であった。

「この撫子の種の意味は西村さんには、わからないだろうけど、わたしにはよく分かるのよ。こんな事があつたの、初めてのお客さんだったけど、どっかの大学の先生みたいな人が若い学生さんと来て、屋台の角においてあつた撫子の花見てこれには 父子草 っていう別の名前があるんだって話してたんだよ、私も初耳だったけど、あくる日きた平井さんにその話をしたら、なんだかしみじみ撫子の花見てて、俺今度これ貰って帰るぞ！ って、



あー、涙がで
ちゃった。

これだけ言ってもわからないかもね、あの平井さんはね、佐渡に奥さんと男の子がいたの、でも出兵、そして戦後シベリアに抑留されてたんだよ、戦後、日本ではね、戦死ということ英霊扱いだったの。でも本人は生きてるのよ。そして待ちに待って我が国に帰ることが出来佐渡に飛んで帰ったら、奥さんは主人は死んだものと、やむを得ず再婚、

口じゃあ、あんたの事、喧嘩ふっかけたり、ボロクソに言ってたけど、でも心の中じゃあんたの事自分の子供みたいな気がしてたに違いないんだよ。だって平井さんには佐渡に一人の男の子がいるんだもの。そしてその子も、あんたの年頃のはずよ。

だからね、だからあんたにその種やつてくれって、そう言った後で何て言ったと思う。

来年三月俺との勝負に勝って目指す大学に入学できたら、小さな植木鉢でもいいその種、撫子の種 別名父子草、まいて立派な花咲してくれ」ってね

「解る？ そう！ そうよ、あの人は 生きてる英霊 だったんだよ」

奥さんも子供もいるのに、シベリアに抑留され、飢えと寒さに耐え生き抜き、やつとふる里に帰ったら、ある事情で一緒に生活できなくなつて、帰る家を失つたんだよ。そしてひよんなことで知り合つたあつたあんたに、そうあんたはあの平井さんの息子さんと同じ年ごろなんだよ、だからそうあんたに父子草をまいてほしいんだよ。西村さん、このお金で、夜警なんかやめて一生懸命勉強して大学に合格しなきゃダメだよ」

そしてしばらくして、平井が、おでん屋に現れる。竹子がお金をわたしたことを告げ、西村青年が、喜んでいたことを告げると、平井は嬉しそうに酒を口にするのである。

平井は飯場も変わり、度々は来ないが、たまに来て、その後も、平井は竹子を通し、金を渡すのである。

そして年もかわり、三月、屋台に、一人の客が来る。久々の平井だった。

先客が二人で飲んでいたので、女将は？と聞く、

今、水を汲みに出ていると言うので、しばらく座って待つことにするが、その時、屋台の隅に「父子草」と書かれた木札を差し込んだ鉢植えが置いてあることに気づく。

先客が、これはある学生が大学に受かった記念に種を撒いたそうだと言うので、平井は大喜びで居ても経ってもいらなくなり、屋台を飛び出して竹子を捜しに行こうと走りかけた時、水を汲んで戻って来た竹子とぶつかる。

竹子は、平井と知ると、手をとって

「平井さん聞いて下さい、西村さん受かりましたよ！」と言う。

「俺も気になって来たんだ」

「あんた、見たかい？」

「西村さんが持って来た鉢植えを！」と竹子が言う。

平井は「見たよ」と

竹子が、すぐに西村さんと呼んで来るとアパートに、西村がやつてくる。

久々の再会だ。西村は、「あ！ おじさん、おじさん、受かったよ」

その言葉に喜ぶ平井、平井は、

「お前の勝ちだ」と喜ぶ。

「うーん、違うよおじさんの勝ちだよ。僕はおじさんの心に負けたよ」と。

それを聞いた平井は、

「よーし、もう一勝負か？」と言いながら、いつものおでん屋の空き地に向かう。

「良し！最後の勝負だ！」

と言いながら構えた平井に、西村が飛びついて行く。

両者はがっぷり四つに組む、負けるものか！っと、久々の相撲だ、しかし次第に、平井の目に涙が溢れ、西村

の肩に落ちる、

「おじさんありがとう、ありがとう」と、二人の目に涙が溢れて二人は父と子の抱きあう姿に変わっていたのだ。

戦後七五年、豊かな今、多くのご英霊が、まだシベリアの大地に眠っています。また、辛くも復員されたのに、悲しくも生きてる英霊として生きなければいけなかった方々も、たくさんおられる。しかし東京裁判史観により西洋人の都合の良いように書かれた歴史教科書を学ばされ、歴史の影に隠れ、表に出てこない。生きてる英霊ももう鬼籍とられたでしょう。

我々は決して忘れてはならない、あの終戦時のソ連のシベリア抑留というロシアの国家犯罪の事実を。父子草でした。

一九六七年、東宝+宝塚映画、木下恵介脚本、丸山誠治監督 「父子草」